



俺はひねくれ者だ  
世の中を見渡すと  
嫌いなものばかりだ  
ダイナマイトを体に巻きつけ  
嫌いなものと一緒に心中してやろうかって  
本気でそう思ったことがある

俺はとにかく好き嫌いが激しい  
今現在 世界には六十何億かの人間がいるらしいが  
俺の好きな人間は生きてるのも死んでるのも合わせて  
せいぜい三百人ぐらいだ

今 俺は三十才だ  
これまで世界中の人間を愛せたらいいなと思ってきた  
努力してきた  
でも努力じゃ愛しきれない  
俺が好きな人間はいまだに三百人たらずだ

でもF 覚えておいてほしい  
どんな馬鹿な奴の顔にも朝日は当たる  
お前が本気で誰かを憎んでも  
そいつにも必ず朝がやってくる

F  
その朝日だけは憎むなよ  
俺も  
その朝日だけは憎まなかったんだからな

注1 Fとは友人の息子の名前ですが、個人名なのでイニシャルにしました。

注2 この詩は谷川俊太郎さんの詩『うつむく青年』に触発されて書くことが出来ました。『うつむく青年』はサンリオ発行の、同じタイトルの詩集に入っています。

## 二十代

---

オレを切なくさせるもの  
それだけが たくさんあった  
その切なさを埋める方法やモノは  
たくさん売ってたけど  
そして時にはオレも買ったけど  
いつもハズレばかりだった

金 返せ

## 短歌二首

---

単純な ブ男なんて 呼ばないで  
彼は本読む 我も本読む

なぜ言える 俺に魅力の あることが  
おまえに女 こっちに青草（あおくさ）

## 黙っている理由

---

どうも口先だけで他人の興味を自分に向けてきたような気がする  
だから君の前で黙っているオレは  
ただのツマラン奴なのかもしれない

でもしゃべりまくると時はすぐ過ぎ去ってしまう  
黙っていれば その時を味わえるような気がする  
チャチな言葉で時をどこかに紛れ込ませたくない  
そんな時  
オレは黙ってる

そしてホントの言葉というものは  
空気に触れるとすぐ死んでしまうので  
ホントのことを伝えたい時ほど  
オレは黙っていることもある

しゃべりまくってる奴だけがエネルギーを使ってるって？  
必死な気持ちで黙ってることだってあるんだぜ

## 詩ではない

---

まず世間は詩ではない  
色事も詩ではない  
もちろん金も詩ではない  
私のこれまでは  
世界に詩を求めた三十二年間だった  
でも何でもかんでもことごとく残酷に  
詩ではなかった

モノを食うことは詩ではあり得ず  
つまりは生きることが詩ではなかった  
最終回の『ハクシヨン大魔王』みたいに  
美しくは行かなかった  
全ては

そして最近の私が詩だと思っているのが  
新宿思い出横丁の  
あの豚汁  
あの豚汁の中にやっと見つかる  
肉のかけら  
あれが今の私には精一杯の詩で・・・  
そう書いたら いやらしいことになるのかもしれないが

でも最近 私は分かったつもりなのだ  
詩とは作るものではなく  
見つけるものだというのを